



# The Garage

PICKUP THE GARAGE

さりげなく、深く濃密。  
アンティークのさし加減。

佐々木邸 静岡県

これまで数々のアンティーク・ガレージを手がけてきた建築家が、  
今回自分自身のガレージを作り上げた。  
当然とことんこだわった趣味趣向になっているものの  
それは自分自身の生活に素直に向き合った  
抑揚の効いた大人の趣味空間に仕上がっていたのである。

text/Yuji OHISHI (おしゆじ) photo/keigo KIMURA (木村圭吾)



入り口に並ぶ佐々木さんの  
豪華ヒーレースプライトと  
オースチンセブンスペシャル。床は片側がアンティーク  
材を使った板張り、もう片側  
がモダン仕上げだ。

「ヨーロッパにあるどこかの国のどこかの街。そこは100年前とさほど変わらない昔ながらの風景と建物が今に残る、時間に取り残されたような場所だ。その街はずれにある古ぼけた工場跡。鉄骨はさび、ガランとした空間の所々にはホコリをかぶった機械や作業台が取り残されていた。

そんな光景を前にして、男は時を忘れて立ちつくしていた。その顔には我知らずニヤリと夢心地の笑みが。歳の頃は50代前半だろうか、身なりは申しからず、風流を解するジェントルマンのたまたまいだ。

男はクルマを愛し、しかし同じように音楽を愛し、被服を愛し、建築を愛し、自分の価値観と生活を愛していた。もちろん、仕事も。この男、実はあと100年早く生まれたかったと常々思っていた。クルマにしろ、建築にしろ、古いアンティークなスタイルにどうしようもなく魅せられているからである。

そんな男が偶然にめぐりあったこの場所。この惚

れ惚れする古い時代の雰囲気、たまたま。この中で暮らしたい、この場所に自分の趣味や愛するものを全部一まとめにして詰め込みたい。男はそんな衝動に駆られていたのだ。

しかし、男は実際的でもあった。時代は21世紀、やはりそれなりの快適さは必要だし、クルマの排気音や音楽でご近所に迷惑をかける心配も必要だろう。そこで、この雰囲気を最大限残しつつ、リノベーションを行うことにした。

そうして完成したのがこのガレージである。いや、「ガレージ」とくくるには少々抵抗がある。男にとっては、ここはクルマが主役のガレージではない。主役は自分であり、自分の価値観、ライフスタイルこそが重視されたもの。クルマはオーディオや革のジャケット、愛用するクロノグラフとなら変わるものではないアイテムのひとつなのだ。

このガレージ——あるいは「アトリエガレージ」は、

男にとっては生き方の現れなのだ。傍から見ればあまりにカッコよく出来上がってはいるものの、それが自然であり、偽らざる自分自身なのである。さりげなさ——それが男にとっては心地よいのである」

——そんなストーリーが、ここで紹介するガレージの背景として設定されているのではないかと。言ってみれば空想ストーリーだが、空想に遊ぶのは悪いものではない。それは実現するガレージにリアリティをもたらすものだから。

このガレージは建築家・佐々木茂良さんが自身のガレージとして完成させたものだ。無論、新築されたものであり、所在地は静岡県。ガレージのコンセプトをひとりでいうなら、上記のように「ヨーロッパにある古い工場をリノベーションしたたまたま」。

本誌ではこれまでに佐々木さんの手がけたガレージや住宅をいくつも紹介してきている。特にご自身

要素を盛る「足し算」ではなく、厳選する「引き算」で構成。

# The Garage

拾い集めたTHE GARAGE

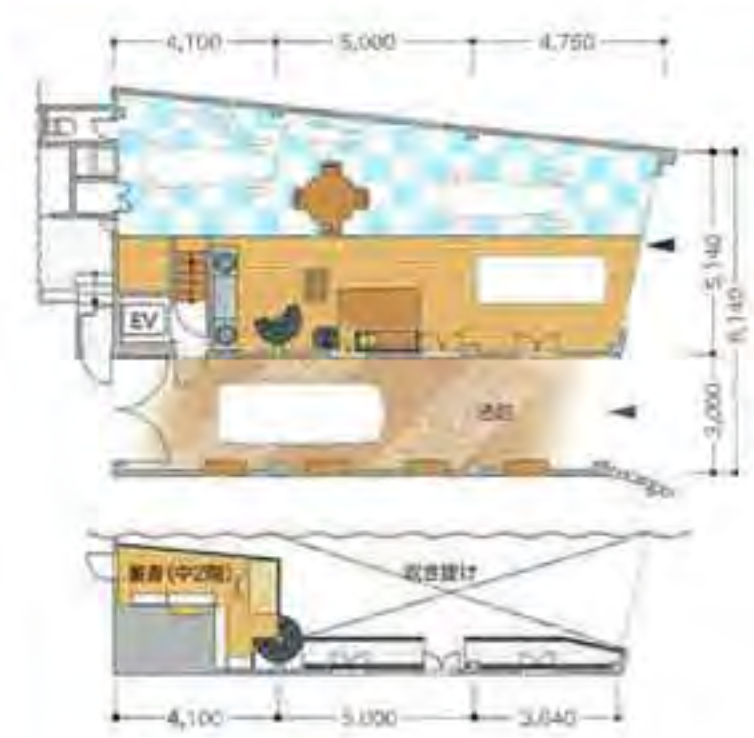


真鍮板があるため、結露防止のためにこのように天井を高くすることができた。また、収納が多い方が広々とした空間がとれるので、とてまあよく好きだった。



3

1 / 昔から使われてきたように感じられるキャビネットも、実は言えばエイジング処理をしたもの。ただし、手前のテーブルを含め、木板はアンティーク素材を使っている。 2 / ロフトの下に設けられた収納棚。重要な趣味であるオーディオセットが収まっている。また、中央部にはミニバーと冷蔵庫を備え付ける予定だという。 3 / 高い壁に沿って、鉄骨造のキャットウォークが設置されている。欧米の倉庫や図書館などでよくある通りだ。上の小さなドアのようなものは明り取り。



ガレージ内には3台のクラシックカーと4台のモトバイクが納められている。グリーンのはフランス製のアンティーク。黒いのは最近のソックスで読んだ品。



窓が外に濡れないように、開口は少なく小さく設置。そのため換気扇も設置していないので、排気ガス対策として排気ダクトシステムを導入した。



株式会社エーエフエーの「EG ウェイアウトシステム」の新品をこんな風にエイジング。どう見ても数十年を経たよごれたがらついた機器にしか見えないのがすごい。

# The Garage

全趣味が集まった空間であり  
仕事の間所でもある。



空間の途中で2階、あるいはロフト的に設けられたオーナーの書斎。建築家の仕事も、図面やパースを描いたりという様となる部分はここで行うという。



左/シンプルに仕上げられた内装。エイジングで汚す方法もあったが、リノベしたという想定なので、設定に忠実にあえて新しいままに。畳板などの余分な装飾もここでは用いていない。右/キャットウォークは、さび、汚れた金属柱に金網が張られているのが普通っぽい。しかし実はこれもエイジングで仕立てられたもの。もちろん、人が歩くことも出来る。

の本拠地である「ぬくもりの森」は、アンティークワールドのテーマパークといえるようなものだ。

この「ぬくもりの森」内には、佐々木さん自身のアンティーク・ガレージが作られている。古い雰囲気提案するスタディの役割を持ったもので、佐々木さんの言葉を借りるなら「色々な要素の足し算」で造られている。それほど凝ったものなのだ。

一方、今回のガレージはご自身の自宅として作られたもの。実際にここに住み、暮らすという前提があるわけで、そこで考えられたのが「引き算」だった。考えられる限りの要素を詰め込んだ「足し算のガレージ」ではなく、そこから余計なものを仕分け、本当に必要なものだけを残したガレージ。そこに残った本当に大切なものを引き立てる空間。今回の空間創作には、そういう狙いがある。

よく見ていただければわかるだろうが、ここに置かれているものは、実はそれほど多くはない。装飾の役割しが果たさないアイテムはいっさいない。ここにあるのは、全て佐々木さんが自分のものとして気に入っているものだけなのだ。どうしても数が増えがちな看板、ポスターなども思い入れのあるものを厳選しているため、壁は本来の白い肌を広く見せ、そのことがむしろ数少ないアイテムを引き立てることもになっている。このガレージは見せるガレージではなく、あくまでも建築

家本人だけのプライベートな空間なのである。

## 34年前、19歳の初ガレージ

数多くの依頼主の夢をかためてきた佐々木さんが、意外にもご自身はこれまではマンション住まいだった。そのため、愛車は別にガレージを借りて保管していたし、オーディオも置けない(なしろ大きなスピーカーなのだ)。それら趣味のものを一箇所にまとめ、身近なところに置きたい。「バジャマでいける距離」というのが憧れであり、今回自宅ガレージ新築の動機になっているという。

ただし、佐々木さんのガレージ体験は早かった。34年前、19歳の時に父親に頼んで自宅の洋間2つをぶち抜かせてもらった。床も取り去って土間とし、そこにクルマをいれ、拾ってきたテーブルとイスを置き、愛車と暮らす空間を楽しんでいたという。

今回新築されたガレージでまず求められたのが、大空間と、それによる広々感。実は左右幅はそれほどでもないのだが、室内高を高くすることで、心象的に広々と感じさせているのだ。そのために、構造は

佐々木さんが「ぬくもりの森」に建てたガレージギャラリー。古くからある町の修理屋さんをテーマとし、雰囲気は抜群。だがこれは「足し算」で構成されているという。アンティークテイストという部分では今回のガレージと同じだが、求めているものはまるで異なるのだ。



# The Garage

クルマはいち要素に過ぎない。  
ガレージを越えた  
アトリエガレージ。

ガレージの最も奥の部分、オースチンセブン越しに全車を見る。室外照明が多いことに気付くが、電気代を考えると95%は白熱球色の蛍光灯を使っている。



1 / 佐々木邸の外観。基本的にはビルトインガレージの住宅だ。屋根は丸い曲面のデザインだが、これは屋根がそのまま壁になるという意向になっているのだ。2 / ガレージドアは、パネルごとに分割して上方に格納されるパーティカルスライド式。パネルは明かりが入る上はガラス板2枚、下は断熱材を挟んだポリカ製で防音対策が施されている。3 / 配管はあえてアラウンドして、エイジングすることで工場や倉庫の錆り気のない雰囲気をかもし出している。小さく見えるスイッチは、昔のものをさらにエイジングして使用。



COMMENT FROM A BUILDER  
佐々木茂良 建築デザインアトリエ  
佐々木茂良さん

今回、自宅マンションから戸建てを計画するにあたり、念願だった仕事部屋(設計・デザイン・オーディオ・ガレージを一堂に盛り込んだ広い空間を組み込みました。オーディオは20年以上前に手に入れたものの自宅に置くスペースが無く、ショールームの飾りと化レクルマも同様に別の場所で保管していました。今回の内装は、元々鉄骨造の古い工場をリノベーションした感じを目指し、古い鉄骨部分や木の床・配管は古いままに壁・天井・一部の床を新しくリノベした感じにしてみました。技法としてはやはりエイジングを駆使し古い工場の趣を醸しつつ長年集めてきた古い家具やドアなどをテーマに合わせて配置しました。

静岡県浜松市西区和地町2949  
ぬくもりの森  
phone/053-486-1723  
http://www.nukumori.jp

## PLANNING DATA

所在地 ● 静岡県  
家主 ● 佐々木茂良さん  
竣工 ● 2012年3月  
構造 ● 鉄骨造  
ガレージ面積 ● 87.54㎡  
愛車 ●  
1959年式オースチン  
ヒーレー スプライト マークI,  
1933年式オースチン セブン スペシャル,  
1929年オースチン セブン スポーツスペシャル,  
VWゴルフ カプリオレほか、モペット4台

## OWNER'S CHECK

■一番気に入っているところは?  
天井が高く、中2階をつくれたところですね。上から見るクルマの眺めは新鮮ですね。

■ちょっと失敗したところは?  
思いをもち込み自分で設計したので特にありません。ただ、空間は効くのですが、電気代が高くなりそうだったり心配な部分はあります。

■次の夢はなんですか?  
今回は30年間の夢をようやく実現することができましたので、次の夢は考えていませんでした。あえていえば、もう少し手をいれ熟成させ、完成に近づけていくことです。

■読者へのアドバイス!  
家族の理解は大事です。そのためには家族にも配慮したガレージ作り、家造りをするのが重要だと思います。

鉄骨が選ばれた。

この高さは、テーマである「古い工場跡」を演出するためにも必要だった。それが現れているのが、壁に沿って造られたキャットウォーク。この部分は、古ぼけた鉄骨に全網を張っただけという簡素な造りで、それがまた工場、あるいはソーホーのような雰囲気をかもし出している。そして、このキャットウォークのつながりとして、中2階の位置にロフト然として設けられたのが、佐々木さんの書斎だ。実はここが建築家が設計プランを練り、図面を引く仕事場でもあるという。この位置からは、ガレージ内を見渡すことが出来、目を向ければそこには愛車たちと自分のお気に入りのアイテムたちが。特に愛車は上から見下ろすという普段はない視点となり、それがまた新鮮であるという。佐々木さんは、愛車を眺める場合はある程度の距離が必要だとも考えている。

一方で、鉄骨造とは思えない素材感あふれるインテリアは、佐々木さんお得意のテイストだ。「古い工場をリフォームした」のだから、壁はエイジングはせず、あえて新しい装いとしたり。しっくり仕上げのようなこの壁は、実は特殊な発泡モルタルを3cmもの厚さで仕上げ、その上を塗装したもの。これは、ここで

音楽を楽しむために防音効果を持たせたものだ。もちろん、断熱効果も高く、調湿性能ももつという。アンティークに見える裏には、現代的な実用性能が確保されているのである。

佐々木さんのインテリア仕上げの特徴は、徹底していること。例えば、アンティーク仕上げの家であってもエアコン本体、照明のスイッチ、コンセントなどは、つい現代風そのままに残ってしまいがちだ。しかし、佐々木さんが手がけるものは、そういったものであってもすべてアンティーク風に仕上げられる。本物の古いパーツを使うのがエイジングなのかはケースバイケースだが、いずれにしろ抜かりはないのである。

そのため、どれが本物のアンティーク部材で、どれがエイジングなのかを教えられなければ見分けがつかない。しかし、それを知らずするのはヤボというものだ。それらはさりげない演出なのだから、さっと見流せばいい。それよりも、昔風の雰囲気を色濃く残しながらも、現代の日々を過ごしていけるリアリティをもったこの空間を楽しみたい。名立たる名車ですら要素のひとつにすぎない空間。主役は自分、そして自分の生き方なのだと言える大人の男の余裕、懐の深さ。そんなさじ加減が効いた居場所として完成している。

入り口にある2台は、この位置・中2階の書斎から見た時に、好きなヒーレーの頭、セブンのリアが見えるようにこう置かれている。上から見下ろす愛車の形が新鮮で好きだという。



ガレージの外に設けられた通路は、前後の高低差を解消するためスロープになっている。ヨーロッパの建物を抜ける薄暗く、怪しげな通路の雰囲気がマニアックに再現されている!

